

論を起し民主主義を体現する存在でありたい
 神奈川新聞論説委員 石橋学
 神奈川新聞「時代の正体」批判について(5)
<http://www.kanaloco.jp/article/127964> より

本紙論説・特報面の「時代の正体」シリーズについて、記事が偏っているという批判が寄せられる。それには「ええ、偏っています」と答えるほかはない。

偏っているという受け止め方が考えやスタンスの差異からくるのなら、私とあなたは別人で、考えやスタンスが同じでない以上、私が書いた記事が偏って感じられていても何ら不思議ではない。つまり、すべての記事は誰かにとって偏っているということになる。

あるいはやり玉に挙げられるのは安倍政権に批判的な記事だから、政権の悪口ばかり書くなということなのかもしれない。

これにも「でも、それが仕事ですから」としか答えようがない。権力批判はジャーナリズムの役割の一つだからだ。それは先の大戦で新聞が軍部や政権の肩棒を担ぎ、非道で無謀な侵略と戦争を正当化し、美化した反省に基づくものである。

そして私たちはいま、権力の暴走を目の前で見せつけられるという歴史的瞬間のただ中にある。

拡大する暴走

シリーズを始めたのは、2014年7月15日、安倍晋三内閣が集団的自衛権の行使を容認する閣議決定に踏み切った2週間後のことだ。

憲法上許されないとされていたものが、解釈をひっくり返すことができるようになる。

憲法という権力に対する縛りを為政者自らが振りほどき、意のままに振る舞うさまは暴走の2文字がふさわしかった。権力の暴走はしかし、歯止めになり得なかったジ

ャーナリズムの存在意義を問うてもいた。私たちは何を見落とし、何を書き逃してきたのか。「時代の正体」なる大仰なタイトルは、時代を見通す目を持ち得なかった自分たちのふがいなさの裏返しにほかならず、遅ればせながらの再出発をそこに誓ったつもりだった。

暴走はいま、加速し、拡大の気配さえみせる。

政権に不都合な報道をするマスコミを懲らしめるべきだと与党議員が息巻く。安全保障関連法を強行採決によって成立させる。果ては国会前で抗議デモを続けてきた大学生に殺害予告が届く。それは異論を封じ込め、排除する風潮が政治によって醸成、助長された帰結であるに違いなかった。

多様性を守る

言論の幅が狭まれば民主主義は根元から揺らぐ。そうであるなら、私たちが直面しているのは、新聞記者である以前に社会を構成する一員としてどのように行動するかという問題であるはずだ。

民主主義の要諦は多様性にある。一人一人、望むままの生き方が保障されるには、それぞれが違っていい、違っていいからこそよいという価値観が保たれていなければならない。それにはまず自らが多様なうちの一人であることだ。

だから空気など読まない。付度しない。おもねらない。孤立を恐れず、むしろ誇る。偏っているという批判に「ええ、偏っていますが、何か」と答える。そして、私が偏っていることが結果的に、あなたが誰かを偏っていると批判する権利を守ることになるんですよ、と言い添える。

ほかの誰のものでもない自らの言葉で絶えず論を興し、そして民主主義を体現する存在として新聞はありたい。

「しんぶん赤旗」2016年1月29日記事によると、東京都東部3区の都営地で、国の指定基準(1キログラム当り8000ベクレル)を大幅に越える高濃度で残っていることが28日、市民団体の調査でわかった。市民団体8団体

は、14年から15年にかけて、足立、葛飾、江戸川の各区の都営アパートの雨どいの下や雨水ますなどの土壌の49カ所で放射性物質を検出し、32カ所で国の指定基準を超える高放射能汚染箇所(ホットスポット)を発見し